

常山紀談

八

函番號	上 / 號
種別	國
種番號	32,11 號
月日	月 日

919.5
338
Vol. 8



常山紀談卷之八目次

一 仙石権兵衛九州よ間者の事

一 嶋津家久嶋原合戦の事 附 惠蔭某が事

一 立花道雪行状の事

一 道雪仁愛深くの事

一 立花道雪高橋紹運猫尾城の事 加の事 附 道雪死

去の事

一 稻葉一徹忍人を免さるの事

一 高橋紹運討死の事 附 立花統増薩摩小囚の事

一 紹運齋藤鎮実の妹を娶らるの事

一 志賀親次山海が山嶺よ兵を伏す事

- 一 高畑三河功名の事
- 一 森迫親心討死辞世の事
- 一 薩摩の勢根白の砦を攻る事
- 一 巖石城合戦坂小坂先登の事
- 一 野矢甚右衛門功名の事
- 一 秋月種長降参の事
- 一 新納武藏守高家氣の事

常山紀談卷之八

常山紀談卷之八

備前國 湯浅新兵衛元復輯録

○秀吉嶋津を討んとかりふ事年久し天正十三年仙石権兵衛を
 商人の体より九州に間者より山崎浦の地理悉く諳り出
 て起卧小見兵を分ち攻入へをさそを計られり

○嶋津中務大補家久肥前小攻入降参の城を攻落し
 龍造寺隆信大軍少く押寄り家久はつら小三千計ありし
 を幾重ととり取り取囲む家久はをばもせだ明日の合戦吾

先陣をばし貝を相圍小切愈るべしと定て夜の明を待た
 係く物の色も分る家久将机に侍てもまを待や、翌日
 かく晴りしりし小子此又七即豊久十五歳となりしを

天晴武者振よ只上帯の結びかきつりりのぞとて結び直し
服指を拙てそ、端を切て後よくつけ若軍小打儀てお死せむハ
此上帯我解べしつりの軍は屍を戦場はけらうんは島津が家小
生まてらる老の思ひ切しりと敵もあり我も英泉は悦ん物と
といひもあへば貝吹立させ真先は隆信の旗本へ切てかゝる隆
津家此弓矢ハ先強の兵ハ矢一筋拵を射放ちて弓を捨ちて刀
を拙て切てかゝるつりも又志くしきりつり隆信の旗本乱立
敗れすまじバ隆信まじりてせと下知し遂小踏止り討死せ
らまじり家久律てわらう人数をまじめ陣を拙てく
あよ龍造寺の臣惠藤そまじり首一ッ血は染く刀は持泳大
将ハ何處におもしつりいぞ功名の印れいとえて家久は近付

あてそを投捨て馬の上たる家久を一太刀斬りし家久
心疾くつり飛下りまじり左の草摺を切て修刀拵あより
つり惠茂を中取らめて討むすまじり家久あつり其を討む
と下知しつれば生捕んとすまじりもあよりつりあを最後と思ひ定め
切て思りしつり終小討まじり惠藤とのつりひと名をばら
ぶ家久惠藤が首を膝の上よ並並びあき剛の者義勇の士とハ
是をこそ云べけれ生捕り対面し龍造寺は送らせんと思ひ
し思ひ切せらる戦死せしつりバ力及ばれし近所の僧徒
請ふ惠茂が吊ひの事念比は沙汰し其の儀詳し記して其儀
よ頼り故郷しやまじり借豊久を呼て今般の約れごとく
上帯をそめきりつりや家久ハ鳴津家の士大将ありそ久後

又中務と稱し、関ヶ原に於て義弘の所を代り討死す。此人なり。

○立花道雪ハ

始戸次といふ立花の初を嗣ぐ。立花と稱は始の名ハ繼連。男子なく高橋紹運の子を娶ひて嗣ぐ。

若くし、時雷は震まじ足痿歩行心よ任せ、常ふ手連を棄て、累代大友家は属して大友家衰へ、れども道雪心を変せ、武勇をくまひ、人をして士卒を足る事子を志す。がめし戦ひ、時ハ二尺七寸ある刀と種ヶ島の鉄炮を以て、手連は入三尺計の棒、腕貫を以て、手連は長き刀押し、若くし百人、手連の左右より具し、軍始まば、手連を以て士よかせ、棒を以て手

連をきり、たえいと、と声をあげ、此連を敵の意中よかき入よ、とて拍子遅き時ハ、手連の前後をたぐり、とて、敵は小く、よ、手連恥し、とて面もみ、とて、かき入られ、手連の左右は、三尺餘の刀を抽連て、一文字よ切て、かき入る、先陣の者ども、まじり、例の言、及よといひ、も、い、に、我、先、よ、と、競、ひ、か、り、い、ろ、れ、堅、陣、を、切、崩、さ、ば、と、い、ひ、も、い、た、り、若、先、陣、追、立、ら、る、時、ハ、道、雪、大、音、上、て、我、を、敵、の、中、へ、早、入、よ、命、惜、く、ハ、之、の、ち、逃、れ、し、眼、を、見、か、し、下、知、せ、し、れ、し、や、と、い、ひ、返、し、て、擡、さ、る、事、ち、り、斯、ま、バ、道、雪、の、士、ハ、一、日、不、幾、度、鎗、を、合、せ、し、り、と、い、ひ、者、多、し、又、道、雪、常、は、士、小、よ、り、こ、き、者、ハ、た、り、た、り、の、之、若、う、と、い、は、れ、老、あ、ら、び、其、人、の、悪、き、は、ハ、い、ろ、と、い、ひ、大、將、の、勵、ま、し、り、此、罪、ち、り、吾、士、ハ、い、ろ、と、い、ひ、及、ぶ、下、部、よ、こ、も、て、も、度、功

名なつたハあつた他の家まで後まてきた士あつた吾方よ来て仕へよ
取かひて逸物よせん吾士の四月朔日左三を清ハ若む初て後まて
事のあつたよいつの頃より血臭き事よらひひく次第よ物よ慣き
今ハ五六人此剛の者と世よいまもぞかゝるとてきよく武功な
き士のあまは明塞ぎのあつた武功はるよよ弱くさつたハ我見定め
ア明日も軍よ歩んよ人よをろろをれ必技懸して討死しよ
な夫ハ不忠なり身を全うしてこそをを死つて給はま各を打
連ぎればこそ勢年老くも牙の敵は中よ有てひらみよる色
を死せざるぞといと懸よ睦くいひく酒酌かゝり其比を
ア々々武具をわけて与へらまれば是ハ勸をよれて重て軍
のあつた時必人よ後まてと勇て聊も武老ぶりの能えぬハ

呼出してあまは人よ死へ此道雪が死しよ違ふべたよあつ
ぢとて勝きとて列の者れ名を呼て頼るはほどは能くあつてよ
といひ又人よれ心を合せし事此道雪ハ天の冥加よ叶ひし
事よと勇め立若くうた士は席上よて心得遠く事のある時
を客の前よて呼おし打笑ひ道雪が士あつたにこそあれは
ども軍よ修て火花を散る陰ハ此人よあつたを能くしよて鎗
追取よまよひて誓られ人よ感下涙を流し此人の為
よ命を捨んとすべしとあり

○道雪の側よ侍る女よ心をかよとて者ありくを志す女体よ
ぞ有る是を志すもの有てある取物強の時やけらハ東國の
大将よ誰とハ志すは寵愛の女よ密よ情を通りよ志すのりひ

を誅せしむるまきとありぬ事を怨といひてその雪の谷を試み
くう道雪打笑ひ若たもの色に迷ひしむるハ必しも誅せんと
有るん人の上は居て君と仰がらんハ仮初のるふ人を殺せば
人宵くゆくのよ國の大法を犯しとふハ突あつとぞ語らま
く彼者付へ函て心は悲又さ雪の仁愛小感ぢ其後薩摩の
軍鎧が嶽の城を攻る時道雪城をさし戦ひし大軍押せり
危うりし小彼者大喜上乱々味方を取めてさぬく我ひら
其ひきにさ雪城ちのく引えとて敵をきびしく進み来て
城門をきそてあぬ斗くくまばかの若又えて死し武士の討死
さるたハ爰より各是よて討死せば城を敵よ奪はまら
返さやくとつふまは鎗を抜き折交るれば合する若

三人あり面もふしむ戦ひて討死しる間ハ城門をさし
○天正十二年大友宗麟 猫尾の城を圍て数十日攻まじも落し
大友の兵は存る氣疲まじりと立花道雪高橋紹運つづく
宗麟は池加りゆと相謀り俄に兵を知り二夜に腰
兵糧を付よと陣觸して八月十八日打立り士卒是ハ何方
へ向くやと怪むるが下知は従ひて三笠郡内山江原へ
打上る是より志本の猫尾へ押せりと下知は紹運先陣に
ア今宵ハや夜まじり月傾きぬ筑後川の急ぎて夜ハ
ゆるん然る敵れ中数十里押通しといふあくと紹運の
従士とられはる雪へかくと云送らる小道雪色をかくあそれ
早く夜の明よかり見晴しと敵ハ極切しとて通るなり

とて棄物を叩きまじらば使者は仍る菟尾大學子よりけき
使を叩き辱めよとせしむるごととて馳ゆる紹運の後卒は謀
おとく筑後川へ押進し八夜明かり渡りぬハかこの際とて
瀬踏ふも不及混々と打入押進し秋月種実北士茲川兵庫と
いふ五十騎計もて星野城より番代りて歸りてくるが
方より誰の軍を押せられぬかと問紹運はそれと下知し
巻て一人もあらず討取首を小高たす並べ軍陣の血祭りと
とて夫より石垣系へ押進し後陣を待揃へ耳納山を越ん
とす忽ち秋月種実筑紫廣門の兵共一所々方より兵
出り爰のははりかこの切所を待つけ鉄炮を打かくる
数をあはせて中も大木を小楯あはて甚陰より鼓吹か

鉄炮を打ちあはれし手ぎれもては負數多よ及べり雪の
棄物昇る人も中も中も候れらば棄物を打ち落とす
道雪怒てあまきをうてと下知して傍より頻りに鉄炮を打ち
かゝりて中もあはれしはりてはさ雪いりし紹運の士もまた
ハおとくぬらむとせしむるごととて何をかれば紹運市川を樹と
りし士も命せられり平き集まりていりて鉄炮を打ちあは
よ又うは木陰より面をさし知れれば市川もきりぬらむ
し小眉回し中も待びぬらむし小倒も死傷敵前後上
アとて狭き路に後陣の由井雪加よりさき雪へ使を以て
討死を遂げしとて送るをうて紹運大返しは是れハ味方の

後陣危くして切羽を越ぐかべりとして取て返し敵を拂て
耳納山の嶺に押上りしるるや夕日小及べり諸卒をかく
と押来りし疲を休めよ今宵ハ爰小陣に居りしとて曠原
に折敷せしり俄に雨降来まじも有將おどろく士卒は詞
をかけたるるふ本より兩將の恩恵をなづき服しきる
者どもなればちんとも疲を覺えざりしとて斯て一夜は
そと小陣の東に木小押付られしりる豊後の兵競ひりり
宗麟も兩將の舉動鬼神のこゝろ成なりと宗麟一諾卒に及
ぶまじりてたうせられりされども宗麟は八人をよむ放ま
たりし故田親家も俄に心整りしり兵を引具しききほ小
歸りしバおひらくもて事ゆる宗麟も引退されしりる兩將も

高良山陣し其年も言ぬ明る天正十三年の夏に及びし
陣かへししして紹運ハ赤司小屯をかく道雲ハ小野村天助の
壇に移らまじりし病付く次第小重くちりしりる吾死しりる
屍小甲曹を忘せ置らるる山の好已れ岳は柳川の方へ向て埋むし
此事背きたるハ我魂魄必崇をなすべしと遺言しりる九月十一日
七十二歳を以て終らまじり断て此より十時振津守を使らして
立花の城にやと統虎ふかくと市戸骸を只一人棄置しりる
人此証も免まじり立花へ帰し入べきる答へらる十時陣所
よゆり此由を以て由井雪加されバ仰の趣ハ不可あふ非し
遺言の重たれば背まじりし雪加先爰めく腹を切法供ひ多
しといひられバ由井大炊某も後を切右脇の侍供よ我立し

と之バ誰も争う残るべたど殉死をばき人恨多小及べり其時
原尻宮内少輔熟くつて各處唯名聞を好む人ハ然
べたれども統虎公の弟為ふよかりたり人ヤ夫後よ存るなりば
嗣君も御腹召せきく人こそよくらめと荒らうたひひまは
雪加つて衣よひゆる上ハ我とひ止るなり棺をバ立花へ歸し余
にせひさうんり然るをし祟のあらんよハ雪加が一旗罨を蒙るべ
とて九月廿四日陣拂して道雪の棺の供して立花へ引取り
○稻葉伊豫守一徹下人罪有て死罪不祈の声を上て泣く
命をしまやと云へ彼罪人やく命をとりて泣よあはれ
命らうバ一太刀恨むべき事斯成果る事の口懐くて泣るなりと
いふを人々悪き奴哉まろく斬棄よとひりめくを伊豫守

聞くそれ助よとて縄を解せいうものして我ハ一太刀打よとて
追放ちられを忝きなり一徹三ひひく立去り其後年経て
一徹病重くかりし時彼下人來て力を盡せしむるを遂
ぢとて又泣く頭く一徹死て葬の後彼下人一徹の墓に詣
て吾々のあやでながく人きくハ君を一太刀恨むとと申
せしがあを君隠まをせむひりお生く居たもむハ刑死小
及て泣ハ命惜きお泣くもなりと人のやさんり恥しく
ひとて腹掻切く死しかり是を以てらんるお戦国の時上お
人下人ハ恨む太平毎為の化は浴し半る時の人よるる
るを思ひあらんるをたつる
○島津義久嶋津圖書忠長伊集院右衛門大夫忠棟を大

將として兵五萬を以て筑前岩屋の城を高橋紹運を攻
岩屋ハ要害の地は河のほとり宝満が嶽に楯籠りて防ぐべし
の要あり紹運愛を去て宝満が嶽に入りればとて勝べき
小あつとて敵子恐まて逃りりと誂らる人も口惜し此城を
墓も定めらるるとしてあらとも動るは四方を圍て巖く攻む
ア多れども驚かへ色もたう義久の士大將新納武藏忠元
矢笛を乞て城中に申すべき事はいと呼りりれば紹運
く何事とやらんと問ふ新納やうらるは紹運の武勇世に名ふし
とくとも大友家と組せしむる亡衰へらまらん近きよあり大
友家ハ切支丹を崇め毎さうして復家の奥ふべきよられば
古き河原一弛とや事のハ疾義久と和平せしむるべし

いひければ紹運すて斯やハ高橋家よて麻布外記とて者
よてい只今表すは昔紹運より秘の事ゆもいひに柳義の
當りて下をすべし人々能くかまへん凡盛衰消長ハ時の運
ゆく古乃細川島山赤松山名を始として今川武田近國を
尼子大内等一度ハ盛る一度ハ衰へるといふことられば紹運
今の限りもあつとよも曹を脱て降参せしとならばや大
友の家も右大將頼朝々の時より子孫國を受傳へぬれや
日向の軍も敗しより貳心あるもの多くあつて今が衰へ
ずりりし事とて今も秀吉公大軍よく九州に渡りしや
薩摩も攻入るも鹿兒島の破まんるも遠くりし勢ひ
盡すも衰へぬるも志を換へハ号する所の耻辱すも人

子瓜弾せしむぐー松壽千年終お朽る事ぞりー人生を朝
露の日光を待が如し只永く世に残らんものハ義名よまこと
そえい御の降参ハ仕らんと高声よ呼らるれば納も又
りあふもたうりや外記とハ名乗れども銘軍たうりでか
詞ぞうりひせん人やあると云はるまかて於降ふとす
えて莊嚴寺は僧を使ゆらまも聞入らるる攻よ
く天正十四年七月廿七日四方より押寄関の声を作らけ
るいゝ声をぞりて攻らるる城中ハ思ひ設けらる事
るれば爰を限らふ防ぎられども終ふ打破らるる三原紹
ゆ

うら太刀のひらびきハ久くはたはせらるるまえあ

登きと一首の歌を堀の柱に書はして討死して弓削平内ハ
強弓のまきとなり矢倉よあがりま詰りつめ糸の種を惜
中射伏らるる左の手は痛むを負敵の中よかけ入て討
まらり高橋越前守伊勢九藏も聞ゆる弓のまきとあ物
具のまきやうら敵を目よかけあまら射倒し矢種盡
くれハ太刀は切先と揃へて出散るは戦ひ一足も討ら
討死しる尾山中務子太郎次郎十六才あり父と一匹
よ死んとそむらるる母袖を扣へらる振切く敵の中へか入
討死しる女片袖母のまきとあらり寄手も討死
屍は四方に谷を埋るぬ既ハ城兵残アおくらりハ何
し猶藤まらるる付ておらるる叫んで戦ひらるる最

期の軍よも人よ笑ふまじいごとく或ハ腹を切或ハ敵と引
組で刺違へ枕を並べく討死する紹運ハ江洲右衛門大夫三浦式
部黒岩隼人ハヤトトヤチウラハ皆刺殺して敵のよふを懲ると
下知ノ薙刀打振薙でせられ今ハ是れぞとて和歌を
門の扉もろく免らまじり

かぐねをバ忠臣の苦み理してぞ中ふのやうなをそむむ死
一説はもこのまれ世ごとく押もあもやの屋のせは下水
かゝく初年二十九才まで自害して失られたり士卒をあ
たまひ深く義厚かりくを救もある紀城をちりて千八百
人の士卒一人も逃散者のたうりハ例少き事なり紹運
始に鎮種と申たり

一説は城中の婦人ハ悉く困り先づして宝満が嶽へ入
られしを害すあそびとつり又紹運薩摩の軍をえ渡
ししる馬煙をく押来る紹運人々向ひ今押来る敵
六十已下せ才已上の者もあそび今軍は打保て五五死
るやうに討死する彼敵兵も又三四年をるさうに
野原の白骨とるさうに人生の影を待たうに
義名を萬世に傳ふる事武士は本志たりといはれ
るば城兵勇氣十倍せし勢を透さば一陣もあて薩兵
と切崩し一人も残らざり討死するもつたり又寄りの大
將を嶋津家久なりともとり紹運の物具は引合し二討の
書に於て中野後とてまじり久そと後今度降

参を勧らるるの誘は後には義のたを別なき討の書状
大友を送り届けのりりしるる中務類ひ稀なる勇將
を殺しけるよ此人を友とせむいさるる婦人しんご恨
事より等々を怨めしきものつたうして僧を供養に
葬礼を執行ひ壇を築きて家久香を焼再ねしるは
義を感ずる國風よて薩摩武者皆焼香して涙を流し
紹運を称美しるるなり又一説よ天正十四年六月薩摩
國書院伊集院右衛門大夫兩先陣よて筑後高良山に押入
嶋津義久同兵庫頭義弘八肥後八代に旗本を陣取り
を焼倒して筑紫廣門の方より八舞で懈りて有る俄に
さ立防戦の備えしるるなり七月七日薩州の軍勢後

川を涉りて翌朝の日廣門の鼓を取囲み廣門を虜とり
同月十三日先陣の方將太宰府觀世音寺小着陣ひし龍
造寺政家秋月種実を始りて相加り十方餘及り岩
屋の禁筑山横岳二日市太宰府のありり尺寸も透間なく
陣一兩將より莊嚴寺の僧を仗りて此度太宰府に
攻よせんハ紹運は射し弓矢のえきよりしん筑紫廣門
二心あふふより是を討べきあて既よ廣門を生捕ぬ空
満が嶽よ紹運の實子を奪まひて堅くちてせらまひる事
謂まらるるなり似たりとて空満を後されしとて云送り
紹運兼ていひぬ事より一言の仰をく押して大軍を以て
某がちりり城下を馬蹄よ散散されしなり弓箭の礼よ非る

とすべしサテメトヲ 相統虎も道雪の家を継 紹運も今も有て関白秀
吉上属しりへ宝満も岩屋も関白の城を復す
すも存もようぶらいの答を使僧帰りて云なればそも
弱くと城を渡すべき紹運よあらぶらさらぶら困むべしとく
諸口の攻めを定め七月十四日より柵をふり矢合を始め
しりさすも城中はくちりてひまある体もなく未申の
方尾山中務が持口より鉄炮弩弓をもて城へ攻める事ある
し打殺数百人打殺し手頃ハ数をさらぶて或時嶺のもれ
寄手より矢田をとて新納茲人と中若とて紹運公よ
すべしあらふらいの紹運麻布外記と名あらて河我ひよ及
ぶら藏人河を盡し利害を説大友友及ハ切支丹の字を説

信有て神明佛法を茂し一天道よ背きし人心散る事
滅亡近きよいやく鴻津よ属せれいやうよヤ後はいらんや
といども紹運公義を説て屈服の事あらく来春と関白
九州へ兵を知さるべくんいらぶ鴻津家れ存亡も計らべらう
おの主の盛る時ハ忠を致し一事へし時も操を替へらる事
以て弓矢取身の道といふ各を鴻津家滅亡の時に臨て船
を隠し謀をおしされいれ只今おびしとく目は餘る十万
の士卒も百年此齡を保つべらう勢も心もいひるんハ士は
義しる道をこそ存せしべられとそんて降ぶべき事ハ鬼
もあらぶあら將重ゆて莊嚴寺の僧を使して八ヶ國に
大軍を引受堅固な城をおしし事ハ廿日よ及べらう紹運公

の武勇九州は毎双きりべし宝満立定記定處とも子細ゆは
和談を取結び軍を名一田を志ほくし中なり一御まで
十万の軍兵は覺してはる人質を一人賜するんやあは
此後大友勝津和後ハ紹運公のゆよるべし事なりとん
よハ其時人質を返し九州一統を仰侍は属しなり其後中
國ハ押渡り嶋津家天下ハ旗を立てるべしと云送るる
紹運許密せし人質を突白り大友家よかさん事ハさも有
かん秋月種実竜造寺よ継し夫より一回ハ九州の亂ハ及
べり根本の人ありハ秋月ハ腹切せ薩州の兩将より今度
の只藤ハ京都又豊州への遠恨ハあはれ筑紫筑前門が反
心を孔明せんしあるりと神文をきて御よりゆひまハ紹運

事よく討てしと然るハ此城を以て墓所と名とこそ
らまはるハ和平も事遂げ遂よ七月廿七日ハ諸軍ハいふ
押きて卯の刻より軍始りて午の刻ハ終中て雲霧ハ大軍
入替りて攻きりりり手負討死りてくはまも死骸ハ
踏越息をも継ぎん攻戦ふりあを限りしとゆひ切し城兵
各持口をも一足も引次切死よ志よりりりハ城陥りぬ紹運の
左右ハ八名を得し剛の者ハ五十人斗よ討ちせられし
後度の勝負をもゆりて今をうたの軍なればあは
を幸ひよ向敵ハ切先を拵へて討てぬり一隊二隊ハ遠の
谷底へおくり落しられハ討計ハ攻入得ざりりり紹運
も討死の士卒を見えりて死しゆるハ毎二の志を

謝イセさるふ初イセなりと一礼イセ一息イセの通イセ者イセは八自イセら氣付イセの葉イセ
を口イセに入イセらるるかゝる海イセは及イセで軍兵イセは愛イセを盡イセされたる有イセ根イセ
數年イセ城イセをちり度イセ々の軍イセは功イセを尽イセし今イセ夜イセ八方イセは一イセも運イセ
をイセ完イセくべきとあゝざる大敵イセの圍イセを逃イセ士卒イセ一人イセも落散イセ
おろし類イセあきさるよといひあへりて後イセ紹運イセ薙刀イセを提イセ
思イセふ征イセ戦イセひく辞世イセの和哥イセを麻イセはす付イセ三十九イセ歳イセと後イセ
を切イセまらるる巴寄イセを攻入イセて敵イセたぐり斬イセる大将イセも又イセ有イセべきや
士卒イセ一人イセも降イセふせは逃イセ返イセるれりしを憐イセれぬ人イセぞなり
アとる内室イセを始イセめ刺殺イセせし暇イセたぐりてさういふことなり
くまひと深く思イセふものごとく育イセるれりし統増イセ此イセ
時イセ室イセ滿イセが獄イセに有イセ薩摩イセの兩將イセ使イセを以イセて珠イセを渡イセさるる

云送イセと統増イセ今年イセ十五イセ歳イセ之イセ城イセ中イセ以イセての外イセ軍兵イセはかく防イセき
戦イセふべき事イセもひもよるる秀吉イセの出師イセを待イセ文イセとて間イセ
あゝとく生延イセて時イセを窺イセふとちりばとお係イセ統増イセを立イセ
花イセは送イセと辱イセけ給イセりるんは和平イセさるる物イセは巴城イセ城イセ
枕イセ小切イセ死イセすべきと答イセへるる巴兩將イセより子細イセあゝと許諾イセ
し神文イセをまきて送イセアが俄イセは約イセを變イセドキバりて立イセ花
は送イセアとせむ其後イセ肥後イセの吉松イセとりつて移イセし番兵イセを
付イセ至イセし紹運イセの内室イセは城後イセ北イセの冥イセとりつて移イセし置イセ
備イセ立イセふ使イセを以イセて降イセ糸イセをよるるんやと云イセ送イセる統虎イセ実父イセ
ては紹運イセハ関白イセの為イセは自害イセを遂イセりひき我イセ又イセ紹運イセのみ自イセ
害イセを遂イセべしとく軍兵イセをよるるんは此城イセの切岸イセとて

仕くんと答へらまじりりかゝる延小代は陣せしめし義久
より兩将小下知し秀吉師を知りて打向はる中云ふ
せり疾兵をよこさるべしとありきまじり八月廿四日兩将太宰
府を引拂ひぬ統虎陣を押知し高取の城を攻落し城
主星野中務大輔兄弟を始悉く討取りてまじり
向ふよまじり花の肉小珍理有まじり
たまじりバあそびてまじり一支部もあらず逃るる秀吉感
状を賜はり大に称せしめし統虎又密に龜造寺ふしの関は
押込らまじり母を奪取しんやと頼まじり龜造寺も
薩州より茶をとるべき志ありしはふはぬしと堀江豊元仙
がまじり若くは軍兵餘多指添て北の関は押寄薩州の關

の者を遣ちしし銘運の後室を奪取候て立花へ送るにけ
まじり後室はは法名を宗雲とよひしとてかくて薩州は
ハ統増を八代へ移し高津加の法基ちしし並てまじりの兵
よ厳ししとまじりせまじりバ附添しし若くははまじり謀を
らせども本國は遠はるぬ謀もまじりき術なく目を送
るるふ高心りしとまじりやまじり薩州は移し下堂院と云
所はまじり秀吉九州へ渡海し先陣薩州千基まじり進
まれしは統虎使を以て統増を討ししとまじりやと義久の
陣へ云送られしは義久子細し及りしとて延ししとて
へまじり答ふ及しとバ十時提津守を迎しとて下堂院は
まじり付添しし面々もあらずしとまじり千基へは遠海を

るくく小秀吉の軍兵船を掛並へ居るるが落人と見て
あつたはたして小船のりひひと陸より取囲んと
十時勝て賢き者よて多り有る小船をかり舟船
漕よせ統増ある事を断られ大将と覺し老船屋
形より再びおをえて諸卒より下知し静めたるは虎口
遁まて千甚し忌兄統虎の陣より入て對面せられ此
統虎ハ後より左近將監宗茂して驍勇無双の大將なり
るより天正十年十月六日秋月と道雪紹運宇竜野を
軍より時紹運自薙刀をとり烈しく戦はるは統虎十
六歳より初陣あり其器量を見て道雪其子ありて
家をも頼むべき事を紹運よ乞て吾子よせられ

○紹運若き時弥七郎といひ比兄の鑑理每夜鎮実の妹を弥
七郎よ妻せしむる約束せられ其初夜中
夜に海に強し迎へ取りて打つぬ後弥七郎鎮実
よ對面の折より兄が申かをせりぬく迎へるべきは軍の中
少て遅らるに頼て迎へさんと語らるは鎮実がよく
申かをせりハ可忘れもいと其後妹ハ痘瘡を煩ひて以て
外よりいづく成ぬ中かきが有後より見届らるべき
あつた今あつた系せんす叶ひごとといひ時弥七郎色
をかへ夫ハ存もなき仰を承りぬるあり毎孫家ハ先祖大
友家より武勇半くよりた弓取ありおすれば兄よそのの
迎へさんと約束あつた事よ夫ハ辭退もいなり我ハ少

色を好むをよほしとて格く婚札あり其腹は二人の男子
出来りたり此迎へたり一以紹運二十才に及びしとや
○嶋津義久大友を攻所々乱ま入志賀太郎親次搦義久に
降らば義久松の尾北城に在て秀吉大軍より九州に渡ら
るるに薩州に引退く親次大は悦び嶮岨の地は兵を伏せ
打破すべしとて鉄炮の多利北人擇み出り山海が嶺の林に
待せり然る處は首藤五郎去又堀八郎といふ者此度の撰
は残りたるを口惜き事よりの密に道に隠て薩摩の若
二騎打落したりおハ伏兵有るといふ縁こそあれ大軍林小
入を分てさざりてまじりて二十人の若ども力なく葉を落す
おはしおけ退く者打殺して引退く親次大息ついで

義久をハ山海が嶺ハ越さるるを天の祐とて義久

るるいと云まはり

○豊後國合志常陸を大友義鎮攻る時佐伯紀伊守一説
唯教大おさる佐伯が士大将高畑三河一日十三度の
功名あり其後人問て僅小鎗刀一兩度迫り合ても大に疲
息切て小兒もも負べた一日十三度の功名ハたし志ハ飽
ちで剛ちりとも力も息も淡きあつてそそりていふ
高畑同て打笑ひ別の子細もさるる我戦場小打候て勿
論のさうとハいひさるる死生存亡の間は於ておのの事
費はさるる故小人ハ強ぐくても我ハ静かならん
大にハ鎗を合せ太刀を打ちちぎる已前よ力を出し氣を張

かゝらん是は依く精神セイシ子外コト疲ツラまツるらん我敵テキはア時トキ
我首ワガクビを敵テキよりクすク敵の首クビを我ワタシらニ此ココ二ツの中ナカ天命テンメイよク
と地チのノひヒく初ハツメハ後ノチまツく似ニまツてハ打合ウチアヒふ時トキ一決イツケツして一鎗イツサヤの
中ナカに勝負シヨウバ合アヒふクたカく疲ツラくシたカくハ不入シラズてハ氣キ
を苦クしめズるハいハ急イツ幾度イツタビ事コトよクもハ胸中キヨウチュウ安閑ヤスカンなりトと答コタ
へツくトとク

○同ドウト城攻シヨウゼマ小佐伯サヘキに属ツクしテ森迫モリセキ一本関一本関三十郎三十郎親正チカサダを取トリ
又戦タカひク討死ウチシする時トキ二十七才二十七才なり常陸ヒツチが従兵ジュウヘイ八山本ヤチヤマ十郎十郎
とりの者トリノモノ其首ミツをとり小楯形コシヅカガタ三本三本菖蒲セウボの曹サウあり短冊タンサツを付ツケし
命イナヒより名ナをとりテ武士ブシのそとソトかみカミきみキミらニあハらレが
常陸ヒツチが戦タカひクて其首ミツ死屍シカバネを高畑タカノヘが許モトに送オウりトしテ見ミるト視シ

正マサハ豊後ブンゴ大野オホノ那ナ三重ミヘ郷サトの人ヒトなり

○天正十五年二月秀吉ヒデユキ鳴津ネを討ウチつ時トキ大和ヤマト大納言オホノリノミコト秀長ヒデナガ近江オミ
中納言ナカノリノミコト秀次ヒデツク八萬ヤチマン御ミ嶋津シマツが豊後ブンゴ府内フチノより薩摩サツマへ引退ヒキノグサし
を退オつク乱入リラン高城タカキ賤シヅの城シロを取トリ囲カコみテ附城ツケシロ五十一五十一ヶ所カ所築キき
きり中ナカ小耳川コミミガハを越コエく根白ネジロの塔トウハ宮ミヤ部ベ善祥ゼンシャウ坊バウ継潤ツグジュン木
下平大夫シタヘノオホウヂ貞基サダモト亀井カメイ影十郎カゲジュウロウ廣政ヒロマサ塩屋シホヤ隠岐オキノ守光モリミツ成福ナリフク原石馬ハラシウマ
助直タケナカ高一タカカ萬餘マンヨとして守モり是コトハ島津シマツが後ノチ芝シを防マカりテるト
以モハ四月十七日四月十七日の朝アサ嶋津シマツ使シを根白ネジロに半ナして高塚タカカの城シロを渡ワタすベシ
士卒シソウを助タスけテるハりトいハへト云イハ送オウすルハ宮ミヤ部ベ五十丁五十丁隔ヘカケして秀次ヒデツク
へ此コノ旨メ申マシて後ノチ兎角トカクの足ヘをヘきテさんトして使シを返カして後ノチ欺カサ
欺カサく急オコせシひキもよクぬハ寄ヨるベシ謀マカりテ其用ミヨウをセせシよクとシハ

人夫千人俄よ山の竹木を伐せ陣の前よ深二間廣三間計の
かゝ堀をかき柵木を造り我もくと物具して待たぬ物守ふ
出よき者とも走歸り敵押寄れと云も果ぬ義弘一萬六千
餘の兵を率ゐ関を揚て攻寄り文於木戸口よ進よ出よ鎗
と名あて相殺ふ田中九久其子彦六國友半右衛門三村三右衛門
を始め大剛の兵ども先を争ひく切て出お殺ふ義弘も義久
の子まよく素より聞ゆる勇將なり薙刀を提け真先かけく
只今此城踏破も考れと呼り多勢堀を越曹の鍛を傾け
鐵のぬく柵の木よ付く引破んとす時兼て巧きと云
ひ久此綱を断て柵を堀の中へ倒せしむ薩摩武者討く
者八百餘人よ及ぶり義弘愈怒り進で屍を踏越て内の柵よ

攻寄透間もろく戦ひくぐ内の柵をも打破り十八日の朝三
丸を攻取り宮部を始先愈死地よ入しれ巴爰を隈と防ぎ
戦ふ斯りくバ秀長三万計よて耳川よ折向ひ根白の方よ
見渡せハ薩摩の軍兵雲れぬと云て鉄炮の音聞れぬ
矢叫びお交り天地も動く計なり川を渡ると進めれぬ
小尾藤左衛門尉知宜秀長の馬は響をえりて義弘が鋒武田
四郎が長篠の掛り口よ似たり関白吉もかあをせよふへく
と強て田々よハ既よ川へ折入しを叩て進よ得よ藤堂
高虎ハ手勢を率ゐ川を渡り堀をより根白よかけ入自
鎗おとり敵数多突伏く宮部よ力を合せたり黒田孝
隆同長政もよの老を引分進より是より材よ右衛門と云

剛カウの者モノを遣ツカして唯タビ今イマ秀長ヒデナガ六万ムウマンの兵ヘイを以もつて後ウシロ巻マキせしむと呼ヨハハ
らら色いろ々々ままばば文ぶん武ぶを始はじめ大おほ勇ゆう之の戦いくさべり長なが政まさの士し栗山トリスヤマ後うし者もの
川カハを涉ワタり義弘ヨシヒロの陣じん小切せきくかかく秀長ヒデナガの士し大将たいしやう羽根田ハネダ長門ながと
ちも千せん計けいの兵へいまま黒田クロダ父子おとより方かたららとと鎧よろいを打うち入いれ攻せ戦いくさふ
小早川コサカハ隆景タカカネも三千さんぜん計けいまで耳川ミナカハより来きる秀長ヒデナガ今いま敵陣てきじんよりかかる
べきし存ぞんまましとも人ひと々々同心どうしんせせしむむ必かならず何なに事ことも問たずなれとも隆たか
景かた冷ひや笑わらて物ものをいいははかかくくああ井上イノエ伯耆ハツキ就遠すゑん浦兵ウラヘイ部べ宗徳ムネトク
古ふるき背破セワリの物具モノクキ忘わすれてもも牙ヒメツ鴻津ヒメツハハの客キヤク人ひとたたり訪来トヒキタり
小出コデ迎むかひひ弓矢ユウヤの礼儀レイギは遠とほくああべべ軍評定イクハヒヤウヂととすするるややゆゆと
秀長ヒデナガをを啖くりりままししても進すすむむたたりりこれこれののたたりりこれこれハ隆景タカカネを
打入うちいれて川カハを渡わたり敵てきに後陣ゴジンを取切とりきりんと進すすめめるるは是こゝより

薩さつ广ひろの軍乱ぐんらんを以もつて敗小たいせうししるるは義弘ヨシヒロの從子じゆうし三郎忠親ざうしん踏ふしして
討死うちじししるる思おもひひ小早川コサカハ使つかを秀長ヒデナガに陣じんへへききりり味方ミカタハ八万はちまん
餘あまりり銃炮テウポウ三千さんぜん計けい左右さうぶの嶺ねをえ切きり打うちたたるるををはは義弘ヨシヒロを
打取うちとりり掌てのひらの中なかににららううととすすれれども知宣チノブ堅かくく田ためめて
追おぎぎりりののバ義弘ヨシヒロ敗軍たいぐんは士卒ししゆを集あつめめるる火ひををかけ引取ひきと
りり後うしもも士卒ししゆ五十ご餘じゆ人にん戦いくさひ疲つかままるるをを生捕いせとりり
来きるる助すけて降くださんさんいいううああとといいはは是こゝ見みららるるは生いて又またゆゆとと紙かみ
小こままりり警しやう子こ結付むすけけるる疾はや首くびをを刎きららるるへへとと皆殺みなころされれ
たり薩广さつひろは人の勇氣ユウキととゆゆりり秀吉ヒデタカ官くわん於おハ日本ニッポン毎まい双さう
とと必感状カニシヤウをを与よへ尾藤ビドフハ領國レウコク濱州ハシチウを召放めしはなされれるるととや
○秀吉ヒデタカ將帥しやうすいをを伐きるる時蒲生ガーフ氏うぢの前田利長マエタリチサダ巖石イワシタクの城しろを攻せららるる

○小^{オホ}氏^{ウヂ}郷^ノの先^マ陣^マ蒲^カ生^ミ源^ノ左^サ馬^マ此^コ以^トハ^カ坂^{サカ}小^コ坂^{サカ}とい^ハひ^タら^ズぐ^ラき^ハ先^マ
 進^マで^シか^クら^シて^モい^ちぢ^んと^ス聖^ス思^シは^シし^テ白^シき^ハ吹^フ貫^スを^メ門^ノ
 中^ノに^テ押^ス立^テを^シめ^キは^シら^ズん^で相^ツ戦^フふ^雨の^降め^く鉄^テ炮^ヲを^チ打^ツ
 せ^バ吹^フ貫^ハ芭^バ蕉^ノの^秋風^ハ破^ラま^らし^ムる^ガこ^と大^オ音^ネ上^リて^一足^ト
 引^クな^考え^と下^知し^面も^あら^ずで^攻入^メる^をほ^シ陣^ノを^シぞ^ク
 め^る蒲^ガ生^ノが^肉れ^士太^お小^コ坂^ノとい^はる^大別^{タイ}此^コ者^ノよ^と口^ノを^シぞ^ク
 せ^らり^りる^寺治^テ美^ミ濃^ノ守^シ此^以ハ^守左^サ馬^トとい^ひら^ズぐ^ラき^ハ先^マ
 吹^フ貫^ハ立^テ坂^ニ上^リて^利長^ノの^士松^ノ系^久兵^衛を^始と^して
 先^ヲを^争ひ^攻入^終に^城を^攻落^して^首四^百餘^打ら^せり^秀吉
 氏^ハは^慈状^ヲを^与へ^らし^小坂^ハ金^金錢^十四^羽織^ヲを^賜り^ぬ
 一^説ハ^小坂^ヲを^一番^トと^記し^て秀^秀吉^坂を^賞し^て刀^ヲを^與へ^らし

小^コ坂^ノ申^スる^ハ一^番の^賞す^べき^ハ栗^栗田^ノ中^ノ人^ノ栗^栗田^ノ
 名^ノ吹^フ貫^トを^以て^小坂^ガ吹^フ貫^トを^以て^目を^立て^し
 へ^らし^と傳^ハる^ハ秀^秀吉^大に^鐵刀^ヲを^栗田^ノ與^へら^し
 ら^しとも^いは^れり

○野^ノ矢^ヤ甚^シ右^ミ衆^ノ門^ノハ^敵五^人討^テ首^五ツ^提て^氏口^ノ前^ノに^来る^氏
 郷^ノを^あら^ずく^もそ^の多^ク取^ルる^をめ^めし^て問^ハふ^敵
 の^太刀^先左^ノ腕^ハあ^らず^と存^リし^時討^ツせ^バ中^ラぬ^矢ハ^有り
 物^ナら^ずと^ぞや^らる

○秀^秀吉^津津^ヲを^伐る^時秋^月種^長小^熊の^城を^出て^秀吉^の陣^ノ
 至^リて^後家^ノ一^家子^傳り^りる^楸柴^の茶^入と^て名^ヲを^手物^有
 八^八世

とこそすけあはれ一日又をやと問まはす種長速よなまなり
いへいと云秀吉はくは使を以てなまよとて秋月の後者を返
してかの茶入を取来る秀吉見てすし小優まはる物なり家の
寶事とれども我は得させんやと懇まいせしは種長既小
曹を脱でよあ上ハ係をさしむたやのいへきと申は秀吉
は悦むれ久しく我陣所よ左と軍兵ども怪しく危ふせ
づれよ疾歸ま我を防ハ弓箭を身のならひさる降参の
上ハ吾恨も家も不殘領地本のこしくさるべしといせれし
種長悦びて弛歸る種長が士卒若秀吉種長を害せしこ
ろあはれ秀吉乃陣よかけ入切死せんといひ定て居し
くし小歸りて委しく秀吉の詞茶入を乞まはるを許し

くまは皆さひもよぬ事よといひあはれいと聞傳へく

九州の敵多く戦どして降参せり

○新納武藏守忠元ハ島津家の士大将之勇名をりて指を

折了時第一なりとて大指武蔵と稱しり義久秀吉よ降

参の時新納ハ肥後の塚泉の城よりり日本國の軍を

引受一戦をせしり降参せんハ弓箭の毎礼なり疾疾を

寄させし一軍して討死せんとて送るも秀吉頗て

師を城下よ進めしりしかの株の路三四里う程ハ馬の鞍を

おろし鞍の紐を解むしり此峻難よて輒く打入りし武

藏も暫く支へし後降参せしと下知せしとつり今ハ是を

かり主君既し降参せし上六家臣の所しり争でそを

心^{ソムカ}に背^{ムカ}んや弓^{ユミ}矢^ヤの礼^{レイ}義^ギを^シて^ルか^クヤ^リと^シて^ルこ^トを^シて^ル日^ニ本^ニ
 の軍^{イクサ}を城^{シロ}に引^{ヒキ}受^{ウケ}る事^{コト}士^シは^シ一^{ヒト}面^{ツラ}目^メを^シて^ルこ^トを^シて^ル城^{シロ}を^シて^ル
 一^{ヒト}説^{セツ}は^シ嶋^{シマ}津^ツ降^{カド}参^{サシ}の^ノ後^{ノチ}鹿^カ見^ミ島^{シマ}の^ノ外^{ソト}に^シて^ル城^{シロ}を^シて^ルハ^シ壊^{コボ}つ^ベき^ハは
 秀^{ヒコ}吉^{キチ}下^ゲ知^チせ^しま^しり^し新^ニ納^{ヒロ}ハ^シ城^{シロ}は^シ籠^{コモ}り^て防^{バウ}戦^{セン}の^ノ事^{コト}
 段^{タン}を^シて^ル其^{ソノ}所^{トコロ}も^モ病^{ヤマヒ}と^シて^ル引^{ヒキ}籠^{コモ}り^て居^イり^し小^コ秀^{ヒコ}
 吉^{キチ}聞^キぬ^テ休^{タイ}あ^りて^ル歸^キ京^{キヤウ}に^りて^ル其^{ソノ}後^{ノチ}嶋^{シマ}津^ツ上^ノに^シて^ル居^イり^し武^ブ
 藏^{ザウ}守^{シュ}も^モ供^{トモ}に^シて^ル小^コ程^{チヤウ}に^りて^ル秀^{ヒコ}吉^{キチ}何^ニと^シて^ル新^ニ納^{ヒロ}ハ^シ
 城^{シロ}を^シて^ルは^シ壊^{コボ}捨^スて^ル合^カ戦^{セン}の^ノ設^{セツ}を^シて^ルや^シ怪^{アラ}し^まる^{コト}と
 向^{ムカ}ま^りし^り武^ブ藏^{ザウ}守^{シュ}人^{ヒト}々^タの^ノ答^{コタヘ}を^シて^ル進^マり^て出^デて^ル仰^{オウ}出^デされ
 し^り吉^{キチ}義^ギ久^{キウ}下^ゲ知^チせ^しら^るこ^トも^モ美^ミ八^{ハチ}と^シて^ル軍^{イクサ}を^シて^ル志^シし^て居^イり^し
 小^コ踏^{フミ}り^て通^トら^せら^るこ^トも^モ恐^{オホ}多^クく^りし^りも^モ恨^{ウラ}み^を
 せ^しり^し

く^レな^りし^り其^{ソノ}子^コ細^{サイ}ハ^シ城^{シロ}を^シて^ル兵^{ヘイ}を^シて^ルも^モ古^コよ^クに^シて^ル俗^{ソク}な^らむ
 一^{ヒト}あ^らむ^レ只^シ今^{イマ}日^ニ本^ニの^ノ主^{ヌシ}と^シて^ル世^ヨに^シて^ル稱^{キョウ}し^りし^り関^{ケン}白^{ハク}様^{ヤウ}を^シて^ル小^コ
 筑^{ツク}紫^シの^ノと^シて^ル引^キ出^デし^りを^シて^ル鹿^カ見^ミ島^{シマ}に^りて^ル軍^{イクサ}を^シて^ル嶋^{シマ}
 津^ツが^ノ家^カの^ノ誓^{チカエ}と^シて^ル新^ニ納^{ヒロ}ハ^シ城^{シロ}を^シて^ル破^{ヤブ}棄^スし^てハ^シ悪^{アク}た^らぬ
 め^メ踏^{フミ}淡^{タン}せ^しり^し軍^{イクサ}兵^{ヘイ}を^シて^ル向^{ムカ}し^りハ^シ必^{ヒツ}定^{テイ}たり^し其^{ソノ}時^{トキ}一^{ヒト}戦^{セン}
 仕^シバ^ハ関^{ケン}白^{ハク}の^ノ御^ミ馬^{ウマ}を^シて^ル向^{ムカ}し^りし^り城^{シロ}を^シて^ルと^シて^ル末^{スエ}代^{ダイ}を^シて^ル
 也^ヤハ^ハ伊^イ人^{ヒト}な^らん^{コト}ハ^シ子^シ孫^{ソン}の^ノ面^{オモ}目^メを^シて^ル是^{コノ}事^{コト}や^シら^んべ^き付^ツ
 て^ル出^デ火^ヒ花^カを^シて^ル一^{ヒト}足^{ソク}も^モ引^{ヒキ}ぎ^て付^ツ死^シし^りと^シて^ル是^{コノ}又^{マタ}武^ブ名^ナ
 と^シて^ルや^シら^んべ^き敵^{テキ}に^シて^ル一^{ヒト}筋^{スサ}も^モ射^イら^んべ^き射^イら^んべ^き城^{シロ}を^シて^ル破^{ヤブ}捨^スら^んべ^き
 口^ク惜^{セキ}く^りし^りひ^びき^き新^ニ納^{ヒロ}ハ^シ日^ニ向^{ムカ}口^{クチ}を^シて^ル宮^{ミヤ}の^ノ善^{ゼン}祥^{シャウ}坊^{ボウ}を^シて^ル始^{ハジ}
 と^シて^ル先^{セン}陣^{ジン}の^ノ人^{ヒト}々^タを^シて^ル追^{オヒ}合^カたり^しし^り嶋^{シマ}津^ツ降^{カド}参^{サシ}の^ノ事^{コト}

告来^{ツケキタ}引返^{ヒキマゼ}下^シゆひぬ嶋津^{シマツ}が兵^ヒを以^モて日本國^{ニホニゴク}の大軍^{ダイセン}に
引受^{ヒキウケ}合戦^{カクセン}始終^{シヨウリ}の獲利^{ハカ}を計^{ハカ}るべしハルをゆひども新納^{ニヒロ}
肥後口^{ヒゴノクチ}を防^マぎまゝ人^{ヒト}ハ地^チハ嶮^{ケシ}あり関白^{セキハク}殿^ノ下^ノいづま智^チ
謀^{マウ}きりくま^マくおち^マりま^マりも輒^{タギマ}く攻入^{クウジュ}のりん事^{コト}を
ゆひもよ^マくさ^マるる^マ嶺^{ミネ}と谷^{タニ}より種^{タネ}々島^{シマ}の洗炮^{センパウ}を
打^ウりけ^マゆひのま^マる先陣^{サキジン}を打^ウるや^マや^マべた^マ今^{イマ}今^{イマ}至^シ
て^{ホシ}念^{ネン}ある^マ事^{コト}ども^マなり^マと恐^{オウ}る^マ可^カなり^マ申^マする^マを秀吉^{ヒデヨシ}
聞^キく^マ新納^{ニヒロ}ハ^マ及^マび^マる^マ勇^{ユウ}持^ヂあり^マと^マ大言^{ダイゲン}外^{ガイ}言^{ゴン}ふ^マ
か^マり^マる^マ

常山紀談卷之八終

日本國の主とて... 常山紀談卷之八終

